

ADULT
ONLY



まい
たけ

舞・TaKE



目次

表紙	イラストレーション	流一本	
中扉	イラストレーション	流一本	
目次			2
舞・HiME(こみっく)		流一本	3
特別メニュー(SS)		白朧	15
舞衣イラスト(イラスト)		くろうさぎ	21
秘密の家庭訪問(こみっく)		流一本	23
奥付			



何やってんだ
お前?

うひゃー!!

あ...あのね
これはその...

今度の同好会で
コスプレする事にな
っちゃって...

そしたら千絵
が...

カラオ
同好会



いや案外
似合ってるぜ

そ…そお
ありがと…



やっぱり…
変…だよな？



って言うか
むしろアリ!?

え？

ちょ…

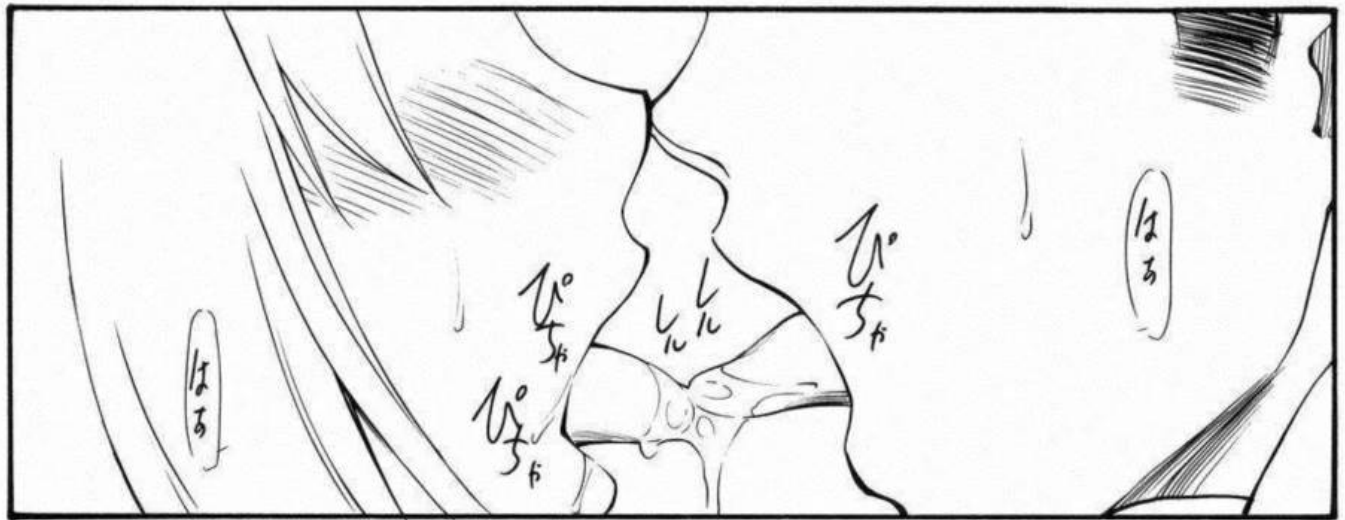


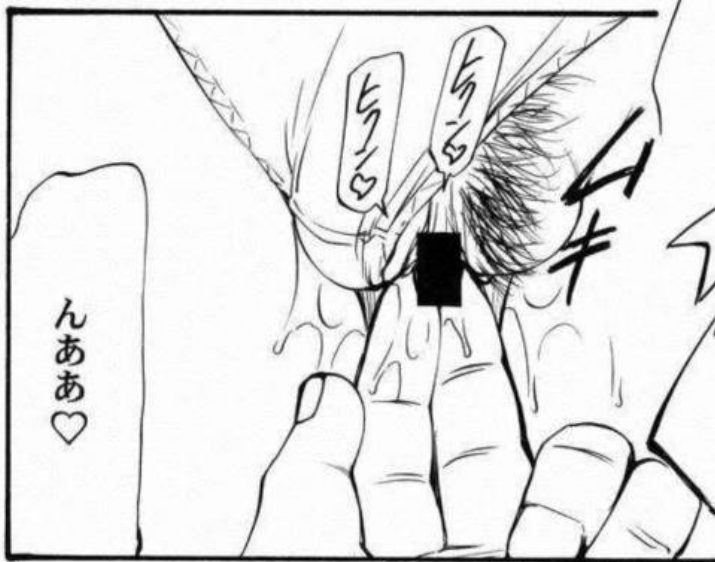
まーいゝ
ちゃん♡

や…やだ
祐一ったら何
その気出して
るのよ



ん…





あ...

はあ...

ん...

だめ...

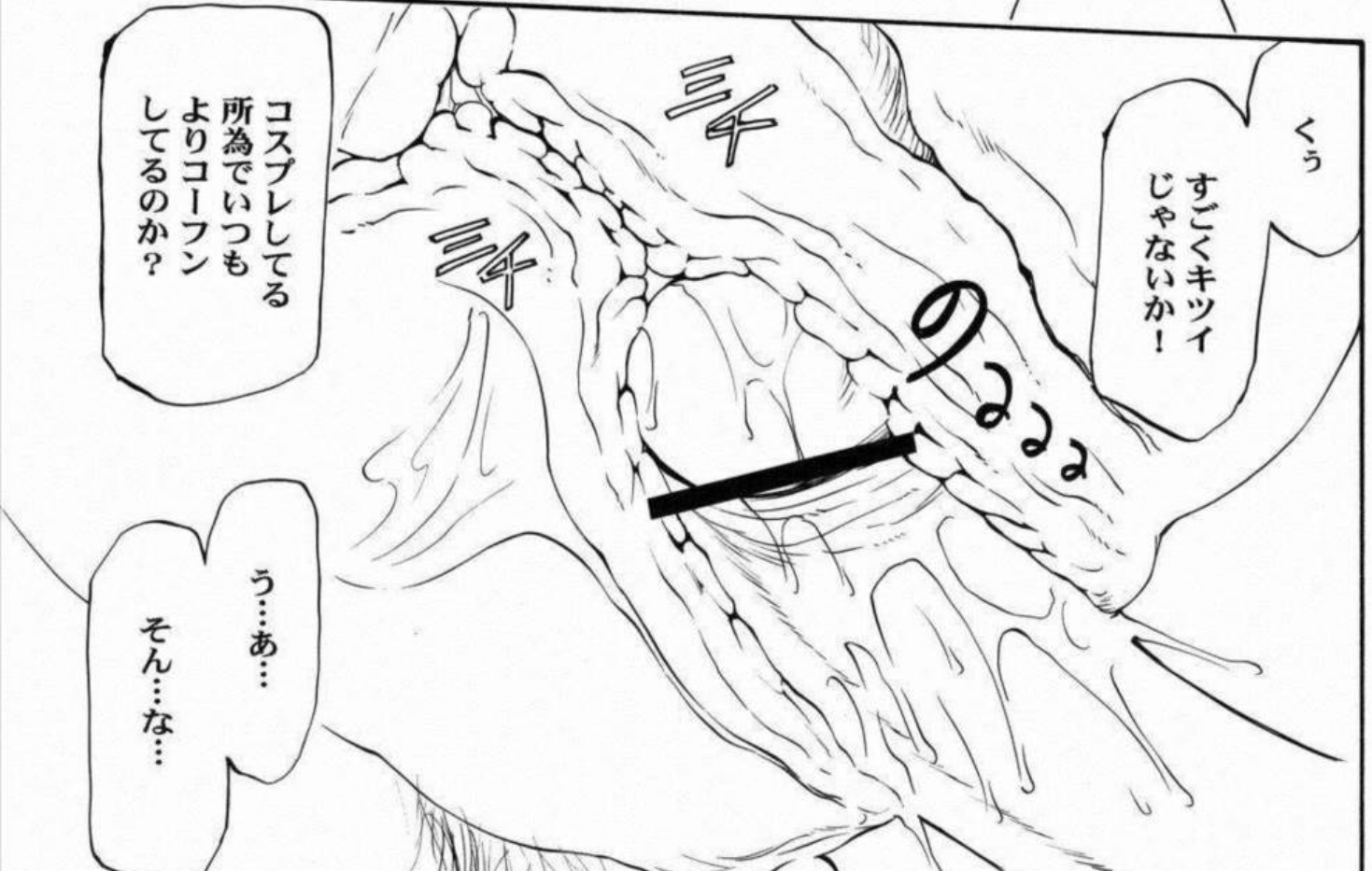
や...

んああ♡

祐一の...

ちようだい...

祐一...私...もう...







舞衣!

舞衣…



は…ああ

感じるう

感じちやうのお♡



ブ
ブ
ツ

んほおおお
クリいい♡



いつ…ああ…

気持ち
いひい—♡

グ
グ
グ

コスプレで
おま●こお♡

おま●こお♡





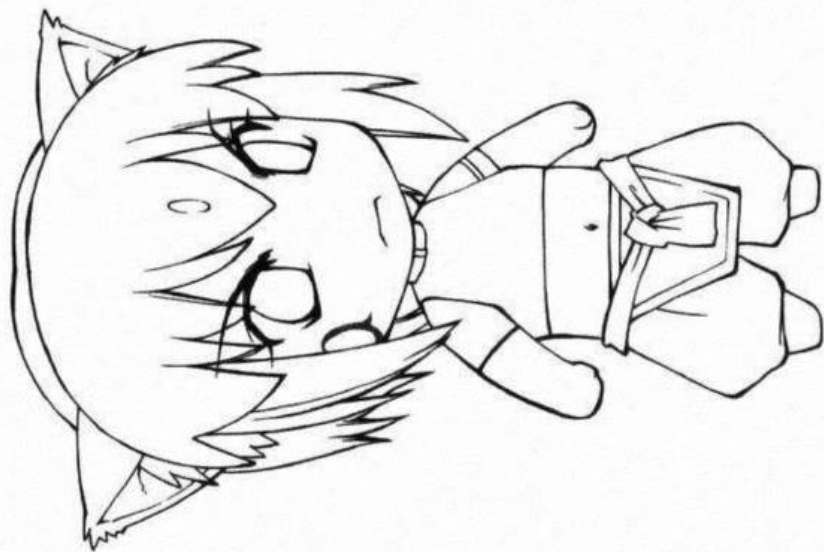


す...すごいよお
コスプレこれ...
癖になっちゃう♡

ほろ

ほろ





特別メニュー

著者 白蘭

「私、なんでこんなことしてるんだろ？」

ファミレス、リンデンバウムの制服に身を包んだ、結城奈緒は述懐する。リンデンバウムの入口手前の道路の掃除をしてる自分、どこで間違ってしまったのだろう。

「奈緒ちゃん、サボってないで手伝って！」

同じバイトの鴉羽舞衣が店内から声をかけてきた。良い娘ぶって、奈緒には気に入らない女だ。

「もう、今日は人少ないんだから、暇な時間でも準備しないとすぐ忙しくなるよ！」

「へいへい」

昼のランチの時間帯を過ぎ、学校帰りの客で賑わうまでもう、一、二時間はある。

仕方なく、掃除道具を片付け、手を洗って中に入る。

カラーン

「いらっしやいませ」

「いらっしやいませ」

明るく元気な声とは対照的な声を奈緒一人だけあげる。

「奈緒ちゃん、もつと明るく声掛けなと！」

「はいはい」

奈緒に注意した舞衣は、客からのコールでテーブルに向かう。

（なんでこんな面白くもないことに精を出してるんだか……）

弁償金額五万円。

たまたまヒマつぶしに寄った。パフェを注文し、ファミレスで奈緒がほんやり窓の外を眺めていた。気付いたときには、視界の端をなにか黒い塊が横切った気がしたら、もう荒れ果てた惨状だった。

テーブルは引っくり返され、中央から綺麗に真っ二つで、注文したばかりのパフェや周りの物が散乱している。展開についていけず、混乱していると、周

りには人が群がっていて、逃げ出すことも出来なかった。

可愛い女の子を演じて、同情を買っても、この惨状は無くならないわけで、店側も気の毒には思うが、弁償は揺るがなかった。

夜に男を釣れば、ものの数日で集まる金額ではある。うまくいけば一晩だろう。

しかし、事故が起こった当日か強制労働となり、バイトが終わると、体力は底を尽きかけていて、出会い系のサイトを利用することもままならない。

おまけに、バイトが終わったら、鴉羽舞衣が寮まで一緒だし。

「ああああ！ ストレスが溜まるう！」

奈緒の脳内では決して、ここから脱出する方法が検討されていた。

（そーだ、楽して稼げそうな方法あるじゃない。一石二鳥な方法が……！）

「いらっしやいませ」

早速、客を案内する。バックヤードに連れ込みやすい済みのテーブルへと。

客は鴉羽舞衣の弟、鴉羽巧海だった。

「あ、あの……、お姉ちゃん……は？」

「ああ、今休憩中です」

（面白いかも……）

「ご注文はなんにございますか？」

奈緒は巧海にメニューを見せる。

魅惑のスペシャルコース 10,000円

でかかかと、メニューの間にポップが挟んである。イヤでも目につくように。

「あ、あの……、これって？」

「はい、魅惑のスペシャルコースですね。一名様ご案内！」

有無を言わず、巧海の腕を取り、バックヤードへと引きずり込む。

「あ、え……？ ちょっととを……」

「あれ？ さつき巧海来てなかった？」

休憩から戻ってきた舞衣は、先ほど巧海の姿を見た気がして、厨房で作業中の同僚あかねに声をかける。

「さつき、奈緒ちゃんがオーダー取ってたと思ったけど？ あ、舞衣ちゃん、

領収書の在庫どこにあったっけ？」

返答ついでに、仕事上の確認を訪ねてくる。

「ありがと。領収書は……、確か事務所の……、何処かで見たんだけど……。探してくる」

舞衣は身を翻して、バックヤードへと戻っていく。

バックヤードに入り、事務所の前まで行くと、中ならなにか物音が聞こえてくる。

「ありや、誰か居たっけ？」

少し開いた、ドアから誰か居るのか確認してみる。

そこには、ウエイトレス服を着た女の子が跪き、死角になって顔は確認できないが男の股間に顔をうずめている。

衝撃の光景に後退る。その瞬間に物音を立ててないか不安になって周囲を確認する。

「ん……んん、くちゅ……、はあ……んん……」

中から、声が聞こえてくる。その声に聞き覚えがある、周囲を確認してドアを確認して覗いてみる。

(奈緒ちゃん?)

男の股間に顔を埋めているのは、結城奈緒だった。

ちろちろと舌を男の裏筋に這わせながら、目を細めて奈緒が笑う。ぺちやぺちやと音を立てながら、丁寧に肉棒への口唇愛撫を続ける。

「んぶ……んん……んむ……あはっ、オチンチン舐められて嬉しそうに涎垂らして……。ほら、お口からエッチな汁、出てきてる」

「そ、それは……」

聞き覚えのある男の声に衝撃を覚える!

(……巧海?)
自分の耳を疑い、聞き違いでは無いか確認しようと、より食い入るように覗き込む。

奈緒は、一心に男のペニスに愛撫を続けている。
たつぷりと唾液をまぶした亀頭にを口に含むと、ゆっくりと肉棒を口に収めていく。

(す、すこい……、あ、あんなに……奥まで……)

男の顔を確認しようとしていたのに、奈緒の過激な行為に目を奪われる。

「ねえ、巧海、そろそろ入れたいんでしょ? あたしを抱きたいんでしょ? このスケベな手●ポで……」

奈緒の口から、巧海の名前が出た瞬間に跳ねるように飛び出していた。

「きゃあ!」
何が起こったのかわからないまま、ウエイトレス服を奈緒の体が床に転がる。

「うわっ!」

奈緒を突き飛ばした反動で、そのまま巧海に覆い被さるように滑り込む。その衝撃で射精寸前だった巧海の尿道口から、勢いよく白濁汁が吐き出される。
「きゃっ!」

噴水のように噴きだす熱いザーメンが舞衣の顔を汚す。

「巧海……。あつ、熱い……ああっ!」

舞衣は反射的に目を閉じ、初めての顔面シャワーを受けとめる。状況を理解すると、精液の熱さに呆然となる。

「すこい……。こんなにいっぱい出して……」

ようやく全てのザーメンを穿きだし終えた巧海のペニスを見つめながら、まだ呆然としている。

呆然としている舞衣の顔面にこびりついた白い液を近づいた奈緒が舌で舐め取る。

「ふふ、巧海の精子、ちよつと苦いけど、美味しい……」

奈緒は舞衣の頬から舐め取った精液を飲み干すと、淫蕩な笑みを浮かべ、まだ硬度を失っていないペニスに顔を寄せせる。

「な、奈緒ちゃん! な、何を……」

奈緒の行動を目の当たりのして我に帰る。

「まあいも……」

「あ、ああ……、ううん……」

ポカン開いている口に、奈緒が舌を潜らせる。巧海の精液と奈緒の唾液を伴った舌が舞衣の口腔に侵入してくる。

くちゅ……

「はあ……、ん……、んん。くちゅ……ん、んん……」

「はあああ……、ん……んあ」

濃厚なティープキスが数秒間続く。

「はああ……」

弟の精子を伴った濃厚なキスは舞衣の躰を熱く火照らせていた。
「お姉ちゃんが、僕の……」
その淫靡な行為に見られていた巧海の姿が舞衣の視界に映る。

「ふ、たくみい……」

熱に浮かされてような目で弟ににじり寄る。ゆっくりとウエイトレス服の上着をはだけ、豊満な胸を露出させる。硬度を取り戻したペニスを舞衣は胸へと押し込んだ。大きく開いた胸もとからのぞく乳房の深い谷間に、巧海のペニス

がすっぽりと埋まってしまふ。

「はうっ！」

巧海が上体を仰け反らして声をあげる。

「巧海は、こういうのが好きなのよね？」

ウエイトレス服のが肌臙られ、ポリウーームのある乳房が、巧海のペニスを愛撫する。

「奈緒ちゃんにはこんなこと出来ないから」

すぐ横に居る奈緒を見ながら、びくびくと腰を震わせている弟に囁く。そしてそれは、奈緒に対しての挑発でもあった。

「な、なによそれ！ アンタ、あたしにケンカ売ってるの？」

奈緒は巧海の肉棒を奪いかえそうと、舞衣をぐいぐいと肩で押してくるが、舞衣も必死で踏ん張って譲らない。

「ふ、二人とも……」

巧海は争いを仲介しようとするが、

「巧海は黙ってて！」

「アンタは黙ってな！」

二人の激しい一喝に臙散らされてしまふ。

「大体、アンタはさっきまで私の口でピンピンだったくせに！ こんなでかいだけの胸に、なに欲情してるのさ」

「あらあ、巧海はこうして欲しかったのよね？ お姉ちゃんのおっぱいで、こうむにむむにゆされるのが気持ちいいよね？」

舞衣は勝ち誇った顔で、胸の谷間に啜え込んだ巧海の肉棒への愛撫を続ける。熱くて硬いペニスを胸に感じてただけで、股間が疼いてくる。

熱い吐息がもれる。溢れた愛液が下着を濡らして、太腿まで伝い落ちる。巧海の肉棒を挟んでいる乳房の頂点はぶつくりと起立していた。

（ああ、イヤらしい……。私、こんな格好で巧海におっぱいでイヤらしいことをして、いっぱい濡れてる……）

「ああ、お姉ちゃんの胸、あつたかくて柔らかかくて気持ちいいよ……」

「嬉しい……。巧海のおチンチン、お姉ちゃんのおっぱいの間でどんどん熱くなってる。もつと、感じさせてあげる……」

情欲で濡れた瞳で見上げれば、姉の極上のパイズリに蕩けきった巧海の顔がある。

（巧海、気持ちよさそう……）

その顔をもつとゆがめて見たいと思うと、より一層、乳肉奉仕を激しく攻めたてる。

「ああ、すごいよ、お姉ちゃんのおっぱいが……。あつ、僕、……。もう……」

「ちよ、ちよと……。アンタら、なにやってるのよ」

奈緒を完全に蚊帳の外にして、行為は激しさを増していく。

「ああ……。もう、ぼ、僕……」

「た、巧海……。お姉ちゃんのおっぱいに、たくさん出して……」

ゆさゆさと激しく乳房を揺すり、爆発寸前の勃起ペニスを責めたてる舞衣。一度放出したばかりなのに、巧海はあつけなく二度目の射精をしてしまふ。

「あ、出てる……。巧海の精子、私のおっぱいに……。ああ、熱い……。こんなに……。あはっ、溢れてくる……。んん」

舞衣は、ただひたすら、胸に感じるザーメンの熱さに酔いしれていた。熱くなった、余韻を感じていると、背後から豊満な胸が驚掴みにされた。

「きゃっ！」

余韻は消し飛び、現実に戻される。背後から、舞衣の巨乳をもみし抱いているのは、先ほどのパイズリ行為の間中ずっと蚊帳の外に置かれていた奈緒だった。

「ちよ、奈緒ちゃん、なに……。するの！」

肌臙られた上着の両側から、圧迫されている双つの乳房を乱暴に揉みしだく。

「奈緒ちゃんのおっぱい、綺麗な形……。ふふっ……。まだ硬いんだ……。いっぱい揉んであげる……」

巧海の目の前で行なわれている行為に、その両目は双つの手と双つの乳房に釘付けになっている。

「可愛い……。巧海、奈緒ちゃんのおっぱい、こんなにイヤらしいのよ」

「ダメ、ダメ……。そこいじらないで……。ああ、乳首だめなお……」

巧海に見られながら、舞衣に乳房と乳首を弄られる恥辱に、奈緒の顔が真っ赤に染まる。

（巧海に見られてるのに……。奈緒ちゃんにおっぱい弄られて……）

同性ゆえに知りつくした絶妙の力加減。舞衣の乳首はあっさりと限界まで突きさせられてしまふ。

「綺麗な、奈緒ちゃん。うらやましいくらい綺麗なピンク色……」

同性を罵って興奮したのだから、舞衣の声が濡れている。時折、耳たぶやうなじを這う温かいものは、舞衣の舌だった。

「ひうっ……。はひゅっ」

乳首をつままれ、舌で舐められるたびに、奈緒の口から喘ぎ声が洩れる。

「お姉ちゃん……。ぼ、僕……。もう……」

「いいわよ……。巧海……」

罵られ呆然としている奈緒の軀を、挿入しやすいようにずらし、両足を開かせる。奈緒の女陰はこれ以上ないくらい潤んでいる。

シヨーツは穿いてるものの、大事な部分は愛液で透けてしまっている。当然、その奥に隠された亀裂は巧海から丸見えだった。

「結城さん……」

巧海が奈緒の股間に近づけてきた。
「巧海、奈緒ちゃんはずっかり準備オーケーよ。あんまり焦らすのも可哀相よ」
「うん、わかった……、結城さん……、脱がすよ……」

「ああ、イヤ……、イヤアアッ！」
巧海の指がシヨーツにかかり、ゆつくりと脱がされていく。

（こんなに恥ずかしい格好で……、見られて……、全部見られて……）
股間に冷たい空気が触れて、奈緒はシヨーツを脱がされたことを悟った。目を背けていても巧海の視線が奈緒のアソコに注がれているのを感じる。

「どう？ 奈緒ちゃんのアソコは？」

奈緒の羞恥心を煽るように舞衣は巧海を誘導する。奈緒の脚を広げているだけでは飽きたらず、耳たぶに舌を這わせている。

「う、うん……、すごい綺麗だよ。ピンク色の割れ目がちよつとだけ開いていて、その奥から白っぽい液が溢れてきてる」

「いやあああッ！」

奈緒は必死になつて脚を閉じようとするが、下半身に力が入らず、舞衣の腕を振り解けない。

「巧海、そろそろ……」

「うん。結城さん……、いくよ」

「ああッ！」
奈緒の返事など待たず、巧海は股間にそそり立つ肉棒を奈緒のアソコに接触させる。

くちゅり……

「んふう……」

硬い先端が潤んだ秘裂にあてがわれ、奈緒は反射的に腰を引いてしまう。しかし、背後からしっかりと舞衣が押さえつけていて、逃げることはかなわなかった。

「うううう、あうう……」

奈緒の秘口が悲鳴をあげる。潤滑油となる愛液はたつぷり溢れているが、狭い膣口はなかなか巧海の肉棒を受け入れなかった。

「奈緒ちゃん、そんなに力んでちゃダメじゃない……、ふふっ」

舞衣はいたずらっぽい微笑で、奈緒の耳をすつぽりと啜えてしまう。

「ひやあああ、やらっ、耳い、みみい……」

悲鳴をあげる奈緒の反応を愉しみながら、さらに舌を耳孔へと忍び込ませる。

舞衣は巧海に視線を送る。耳に意識を奪われている今なら、牀から緊張が抜けているだろう。先ほどより、ほぐれている秘口にペニスを挿入する。亀頭が半分ほど処女の女陰に収まると、巧海は一気に腰を沈めた。

「ああああッ！ 痛っ、痛い……！」

硬い棒のようなものが突っ込まれたかと思つた次の瞬間、激しい痛みが奈緒の下腹部を襲った。同時に内臓が押し上げられるような息苦しさや圧迫感が奈緒から悲鳴を搾り取る。

「んううう！ んんんんーっ！」

「あらあ、やつぱり、奈緒ちゃん処女だったのね……、普段はあんなにスレたことしてるのに、ここは処女マ●コだったんだあ……」

耳を解放した舞衣は、唾液まみれの奈緒の耳元で囁く。いじわるな言葉に反応しているのか、巧海の肉棒を受け入れようとしているのか、奈緒の膣口からどんだん愛液が溢れてくる。

「結城さん……、気持ちいいよ……」

巧海の腰がゆつくり引かれ、そしてまた押し込まれる。処女の証である鮮血が肉棒にこびりついている。

「うう……、うううっ、……やあ……」

ペニスが出入りするたびに、さつきまで処女膜があつたあたりに鈍い痛みが走る。

「巧海……、どう？ 奈緒ちゃん処女マ●コの味は？」

「気持ちいいよ、ちよつと狭すぎるけど……」

「ふうん、じゃ……」

舞衣は、さつきとは反対側の耳を啜えこむ。

「ひやあああああ、やらっ、らめええ！ うきゅっ……うひゅうううっ！」
奈緒は、巧海の背中に手をまわし、しがみついている。背中に爪をたてながら、悲鳴、嬌声をあげつづける。舞衣に押さえつけ、抱えあげられた両脚がピクンピクンと跳ね上がる。肉棒が緩んだことにより、巧海は腰の動きを速める。

「うあああああ、おく、奥までええ！」

「ん……熱……、い。んあ……んああッ！」
亀頭の先端が入るときに軽い抵抗があつたが、あとは思っていたよりもすんなりと巧海のモノを受け入れた。

「丸見えよね、この体位だと、巧海のおチンチンが奈緒ちゃんの可愛いオマンコを犯してるのよく見えるわよ」

肩越しに舞衣が結合部を覗きこんでいる。奈緒は半身起こした体勢なので確かに結合部はよく見えてしまう。巧海の勃起を飲み込んでいる奈緒の女陰は想像していた以上にグロテスクで、そして淫らだった。

(恥ずかしい……、こんなイヤらしいところ全部見られて……)

巧海が徐々に腰を使い出すと、それにつれて媚肉も引きずり出されるようにして変形する。泡立った愛液がぐちゅぐちゅと恥ずかしい音を響かせるのも、奈緒の羞恥心を煽った。

「へえ、奈緒ちゃんって汁が多いのね。それとも、結合がとつるところを見られて、いつもより感じてる？」

「そ、そんな……こと……。ああ、ふ、深いイイ……。ああ、はっ、あくううう」

処女を失った直後とは思えないほどの快感の波が押し寄せてくる。

「ダメ、そこ……、そんなに擦ったら……あつ、はああ！ やつ、熱い、熱いのお……」

奈緒の快感に蕩けきった顔に、舞衣も興奮していく。未成熟な乳房を乱暴に揉みほぐす。

「あつ、イク、イク、ダメ、こんなのダメえ……。おっぱい弄られながらイクなんてえ！」

目の前のレスブレイに興奮したのか、巧海のピストン運動が激しさを増す。ひとまわり体積を大きくした肉棒で膣奥を叩き、ヒクつく膣粘膜を荒々しく抉る。

陰毛をかき分け肉芽の莢を剥き、充血したクリトリスを指で捻る。

三点を同時に攻められる、奈緒はあつけなく陥落する。

「イクっ、イク、イクうう！ ひっ、らめっ、クリ、イク、あひっ、いひひいっ！」

普段の気の強い表情から、信じられないようなだらしないアクメ顔を晒している。

乱されたウエイトレスに包まれた、舐を激しく痙攣させながら、連続して襲ってくる絶頂に嬌声をあげつづける。

「ヒイツ！ ヒツ、ヒギイ！ とまらないのお！ あつ、アアアッ！」

ようやくアクメの波が引いた頃には、奈緒はもう苦しげに酸素を求めて身悶えることしか出来なくなっていた。

巧海は、組み敷いた舞衣に、舐を密着させ、ゆっくりと唇を重ねる。お互いに舌を吸いあい、唾液の交換をする。

舞衣はうっとりとした表情で巧海の舌使いにゆだねる。

巧海は、キスを続けながら、胸をまさぐり、ゆっくりをウエイトレス服のボタンを外していく。淡いピンクのブラジャーに包まれた、豊満なバストがあら

われる。豊か過ぎて、逆に躊躇つてるようだった。

「お、お姉ちゃん……」

「いいの。巧海の……。好きにして……」

「うん……」

姉の許可を得て、巧海の口が胸に接触する。

興奮にしこりきつた左右の乳首を交互に口に含まれ、舌で転がされた。それだけでもう昇りつめそうになる。しかし、巧海は乳首への愛撫を早めに切り上げると、さらに下方へと向かわせた。

「ちょ、ちよつと巧海、まさか？」

舞衣が足を閉じたときにはもう、巧海の口は濡れそぼった秘口をとらえていた。熱い舌が充血した陰唇を舐めまわす快感に、舞衣の背中が跳ね上がる。

「はうっ！ んうっ、くふうん！」

愛撫で蕩けた狭孔は簡単に舌の進入を許してしまう。

(ああ……。入ってる。巧海の舌が、あたしのオマ●コの中に……)

硬い肉棒とは異なる、しかし鮮烈な肉悦に新たに秘蜜が染みだす。しかもその恥ずかしい体液を吸音までが聞こえてくる。

(嘘、飲んでるのっ？ 巧海、あたしのエッチな汁、飲んでるっ？ やだ、イヤだから、ホントに恥ずかしいんだからあつ！)

巧海のクンニから逃れようと必死に腰を振ってはみるものの、がっちり両脚を抱えられてはどうしようもない。

「イヤア、飲まないでえ……。巧海……。もう許して……」

舞衣は、必死に許しを乞うが、巧海がようやく股間から顔を上げたのは、それからたつぷり数分が経過してからだった。

「お姉ちゃんのアソコ、美味しいよ……」

「うう……。巧海のパカ……。パカ」

巧海のクンニに軽くイカされてしまったせいで、身体に力が入らないのだ。

あお向けに寝たまま舞衣に、巧海の腰がゆっくりと押し進んでゆく。

「うん……。あ、んん……。んあああつ！」

亀頭のエラが膣壁を擦るたびに、ぞわぞわと全身の毛穴が開いていく。

「あはっ、舞衣のアソコに、巧海のおチンチンが、全部埋まっちゃった……」

巧海と舞衣の結合シーンに覗いている奈緒が、舞衣の耳元に囁く。

「奈緒ちゃん……。いや、恥ずかしい……。そんなに……。見ないで……」

「だあめ、今度は舞衣をたつぷり、いじめてあげる。弟のおチンチン入れられてイクのを手伝ってあげるよ」

巧海は腰を前後に振りはじめ。最初は小刻みに動かして膣道にベニスを馴染ませ、それからペースをあげていく。ただ一定のリズムで突くのではなく、

ゆっくり引き出ししたり、円を描くように腰を捻ったりと、舞衣の性感を刺激してくる。

「あふっ、んっ、んふっ……ああっ、きてる、奥に、奥に巧海のおチンチン届いてるっ！ あっ、イイ、巧海イイよお！」

巧海は舞衣の両脚を片に抱えあげると、白いニーソックスに包まれた姉の脚に唇を這わせだした。

「ひうっ！ なっなに、巧海、何してるのお？」

ソックス越しのキスと舌に感じへはじめた舞衣の顔がだらしなく緩む。靴を脱がされ、つま先を口に含まれしゃぶられた瞬間などは、自分でも驚くくらいの嬌声があがった。

真つ白だったニーソックスは汗と唾液でべったりと素肌に張り付き、もうすっかり半透明になってる。

巧海と舞衣の行為に触発されたのか、奈緒が参戦してきた。

無警戒だった舞衣の唇を奪うと、舌を進入させる。

「んんっ、んむっ、んむむううっ！」

アクメに向けて感覚が鋭敏になっていた舞衣に、絡みつくような舌の心地よさにあつと言う間に陥落してしまうのだった。

（やだ、奈緒ちゃんのキス……、すごい、こんなキスされたら、蕩けちゃう）

いつしか舞衣も自分から舌を伸ばし、積極的に奈緒の唾液を求めていた。注がれる甘い唾をのど鳴らして飲み干す。

「巧海、舞衣お姉ちゃん、そろそろイキそうよ。ほら、目の焦点が合わなくなってきたる」

「う、うん……」

奈緒の指摘通り、舞衣はいよいよ最後の瞬間に向けて急速に快楽の階段を駆け上がっていくところだった。つま先を巧海にしゃぶられ、乳首を奈緒に吸われながら、子宮に響く弟の肉棒に酔いしれる。

「く、くるっ、またくるう！ 子宮が、あたしの子宮が欲しがってるの、巧海の……、巧海の精子、いっぱい、飲みたいのお！」

「お姉ちゃん……、くっ、しまる……、出して、巧海！ ああ、臍に……、熱いの、いっぱい出してえ！ くふうん！」

ピクン！

唾液にまみれた、ニーソックスに包まれたつま先が反りかえる。がくがくと全身が震え、舞衣の牝がオーガズムに包まれる。

「あつ、出る……、お、お姉ちゃん……！」

一瞬だけ遅れて、巧海も射精を開始する。

女体で一番深い場所で龟头が爆ぜ、熱いのザーメンが子宮口めがけて噴射す

る。

「ひっ、ひん！ なか、なかに出てるっ、巧海の、巧海のがいっぱい……出てるうっ！ イグううう！」

奈緒の牝は、細かい痙攣を繰り返して、横たわっていた。

ぶすつとした表情で、リンデンバウムの片隅のテーブルに座り込む。

「予定が狂っちゃった」

コトツ

テーブルに何かが置かれる。

「奈緒、どうした？」

テーブルの上に置かれたバフェに視線を向ける。この間、食べ損ねたチョコレートバフェだ。

「何？」

いつの間にか向いの席に命が座っていた。

「うむ！ この間、お前のばふえを零してしまっただけだから。その代わりだ！」

「零した……？」

「うむ、こーんな丸い猫を追っかけていたら、奈緒のばふえを零してしまっただけからな！」

両手を広げて、無邪気に告げる命の姿を見て、奈緒は、この間の惨状を脳裏に思い描く。

「まさか……、あ、あれは……」

「どうした、奈緒？」

「アレは……、お前の仕業か……！」







はい
どちら様ですか？

ケイイチ君の担任の
蔵本です
家庭訪問に伺いました



ピッポッ
ピッポッ



お待ちしております

どうぞ お入りください



は...い
少々お待ちくださいね



カチ



遠慮なく

それでは

秘密の家庭訪問

by 流一本



今日は
お母さんにお話が
ありましたから

いいえ
かまいません

すいません
ケイイチったら
勝手に遊びに行つて
しまつて…



まあ
こまつたわ

ミルクは
今朝きらしてしまつて…



それじゃあ
ミルクティーを



…

あの…
コーヒーと紅茶
どちらになさいますか？





い…いけません
私には夫が…

愛人をつくって
家に帰ってこない
男がですか？



あ…

はあ

はあ

ちゅ



ケイチ君は
僕に大変なついて
いますね

あなたの事は
何でも教えてくれる
んですよ



ど…どうして
それを…？



ですから
あなたの胸の事も…

あ…やっ…

カアアア

プルッ







本当に
いいんですね？



膣なか射精♡

おま●こにいっぱい
ドピュドピュしてえ！

妊娠させますからね！

ああん

ステキにするう♡

早くその大きな
ペニスでずるむけ
くりま●こ
犯して下さい

ペニス

ペニスう♡



ああ…♡

おま●こ
拡がるっ！♡

んおおおお♡

ほほおお♡

お♡
お♡



あゝ

ブルブル







おま●こからも
ミルクが出ちゃう♡

んふう♡



ただいま



あつ先生!

お帰り
ケイチ君

今日はお母さんに
夕ごはんを馳走して
もらう事になったんだ

本当
やったあ!



あつそつだ ママ

今度の土曜日
マー君のお爺ちゃん家に
泊まりに行つていい?

クワガタ獲りに
行くんだ

いいけど
その前に手を
洗つてらっしゃい



どうぞ先生
特製ミルクティーです



また...
来て下さいね

家庭訪問 ♡

ええ
今度はぜひ
泊まり込みで

あとがき 代りのスタッフの日常つーか、グチ

- くろ 今回も前回同様舞-HIME本です。
白 ポハハハー。俺は違ったぞ。(←前回コードギアスでした)
くろ 変な笑い声すんな！ そうだったっけ？
でも、安心しろ。私も前回印刷所から本が送られてくるまで、流一本が何を描いてるかまったく知らなかったから(笑)
白 今回の舞-HIME本のタイトルは「まいたけ」です。
そして表紙のテーマは「バーシフルだ」。
くろ ……(汗)
どこから突っ込んでいいのかわからん。
「まいたけ」は別に構わんが、いつ表紙のテーマなどと言うものが出来たんだ？
白 君がグースカ寝てる間に決まってる。
くろ ……。 ……まあいい(溜息)。
実をいうと、今回の鴉羽舞衣で消化し足りない感じですよ。
白 じゃあ、もっと描けばいいじゃないか。四枚でも五枚でも。
くろ 私のページ増やしても意味がないですよ。
白 流一本のページ増やして欲しいな。
くろ 激しく同意。
流 無理！ 俺を殺す気か。

白 今期のアニメはどうじゃ？ バンスーフレードが面白いよ。
くろ コードギアスを見なければ！
白 君のギアスは前作もヤツだろ？ 流がDVDを君んちに積み上げてる。
くろ そーでーす！
白 仕方ない。俺と流で、君が見るより多くのDVDを積み上げてやるよ！

12月某日 秘密基地にて

奥付

発行 リーフパーティー

発行日 2007/12/31

発行人 くろうさぎ

ホームページアドレス

<http://www.ob.aitai.ne.jp/~carmin60/>

印刷所 大陽出版様



レレレレレレレレレレ
Vol.12